父の戦争体験

高橋晴樹
中央二丁目

昭和二〇年五月二五日の大空襲で、杉並区方南町四四番地に昭和六年から在住していた家は、完全に焼失した。京王線代田橋駅付近に今でもある和田堀給水場をねらった焼夷弾が、甲州街道と浄水道路（杉並・和泉町から新宿）を越えて和泉町方面に落下した結果によるという。私は当時、学徒出陣で千葉県陸軍戦車学校に入学していたが、軍隊のラジオ報道で、杉並方南町の青バス通り（現在の七号線）が空襲のため不通ということを知った。当然焼け出されたものと観念したが、肉親の安否が気がかりだった。

家には妹の愛子（結婚後死去）と父母の三人がいた。私の直ぐ下の弟は学徒動員で横浜の海軍軍需工場へ、杉並区新泉小学校（国民学校）在学中の妹、弟は揃って学童疎開のため長野県野沢へ、文字通り一家離散の生活を余儀なくされていた。結果的には、そのことにより空襲で死亡者を出さずに済んだのかも知れない。軍隊では日常茶飯事として、敵機襲来とグラマンによる機銃掃射をいやというほど味わったが、実戦の経験がない父、母、妹の三人で防がなければならなかった空襲からうける窮地を助けることができなかったことが、今でも悔やまれる一事である。

以下、亡父長太郎の遺稿の中から、空襲により杉並、中野、練馬へと延焼していった昭和二〇年五月二五日の、火焔につつまれ逃げまどう人々の地獄の模様を、原文のまま記録として提供させていただくことにした。

五月二五日

夜十時ごろであった。皆よく眠っていた。晴樹は千葉の戦車学校に、長年は学徒動員で横浜にあり、京子、三男は学童疎開で長野県野沢に疎開中で、私の家には愛子を加えてわずかに三人の家族であった。この三人の眠りを破って警戒警報が鳴った。毎日、毎夜のことで別に珍らしいことではないが、今夜はとても風が強いのである。飛び起きると一緒に空襲警報が鳴った。しかしこの時、すでに敵機はわれらの頭上にあった。高射砲の

地響きがする。表に飛び出ると探照燈の光の中に敵機（B29）の大きな図体が光の中を悠々と滑って行く。やがて和泉の方面に火の手があがった。幡ケ谷、中野、方南東部も燃え始めた。警戒警報を聞いてからわずかに三、四十分の後である。私は、家内と愛子に逃げよと命じた。すでに四方は火の海となり、風はますます強く、凄惨な中を中野方面から逃げて来る人達が、行列を作って家の前を通った。家内と愛子はリュックサックを背負い、風呂敷包をかかえて家を出た。しかし、私は不思議に落着いた気持である。何も彼も焼けるかも知れぬが、すべてを新しくしよう。そんな考えが頭をかすめた。火の手はいよいよ私の家に迫った。火の粉がばらばらと落ちてくる。隣組の人達もすでにいずれかへ逃れたようである。私は、何一つ出そうとはしなかった。そして表に出たが、ふと思い返してラジオを取りはずして地下壕の中へ静かに入れた。警報が出る度に愛子、三男がよく入った地下壕である。私が家を出たのはそれからだ。熊野神社の方向に行く積りで別府湯の前を通り、方南学校の横の道に出たが、何とすでにここは猛烈な火の海なのである。私と同じようにここまで来て行手をふさがれた人々が慌てて右往左往しつつある。私は、こんなに火の手を身近に感じたことはない。前も、右も、左も猛烈な火勢である。凄い強風である。私は青バス通りを越して向こう側に移らねばならない。頭から頭巾をかぶってじっと火の手を見た。そして火勢の一番弱そうな所へ飛び込んで行った。走った。走った。道を突っ切り、新泉校の方に向かって走った。しかし、もう、新泉校の方も燃えている。私は、ふと猛火に包まれた自分を考えた。その私に、逃げ場を失った人々はどちらへ逃げればよいかを聞いて行くのである。私は行ける所まで行くより仕方がないと思った。それから、暗闇の方向を探しては右へ左へ、あっちこっちの露地を歩きまわった。そしていつの間にか、和泉町を通り抜け畑の中に出た。ここはすでに避難者が道の両側、畑の中にうずくまっていた。手回しの良い人のリヤカー、布団、鍋、釜までが人間と同じように並んでいる。ひどい強風である。私は家内と愛子が気になった。愛子！と呼んでみた。返事がない。ますます気になる。私は愛子の名を呼びながら、およそ人のいるらしい畑の中、小川のふちを歩いた。しかし遂に見当たらぬのである。身体はへとへとに疲れ果てた。少しでも早く焼け跡に戻ってみようと思った。愛子達も私の身を案じて探しているに違いないと思った。やがて夜が明け始めた。私は焼けつくような火熱の道を走って、焼け跡に戻った。家はまだ最後のいぶりをあげ、風にあおられて灰と火の粉が夜明けの空に飛び散っていた。

五月二六日

夜がまったく明け放たれるころになって、近所の人達もぼつぼつ焼け跡に戻ってきた。一生の大事に遭遇しつつも皆案外平気な顔である。焼けるものと覚悟して逃げていたからか、それ

とも何か他に期する所でもあるのか。

家内も愛子も戻ってきた。私とは方角違いの隣保館の方に避難していたのだそうである。この時の一本の煙草（誉）のうまさ。これは晴樹が陸軍病院に入院していたときに貰ってきたものである。焼け跡には熱くてまだ入れない。離れてみているだけである。周りを取り片づける。釜に入れて水をはって置いた唐もろこしが黒こげになっているが、それがまだ食べられそうなので愛子に煮させる。一同、苗村さん方で世話になることにしてひとまず引き上げる。電気のつかない夜がくる。夜になってみると、まだ方々で火が燃えているようである。

五月二七日

今日から焼け跡の作業が始まる。まず取り片づけである。小屋を作ることである。そして今日から、今までにかつて経験もしなかった生活が始まった。（以下略）